

「第26回 日韓河川及び水資源開発技術協力会議」報告

前 研究第四部 主任研究員 高田 晋[※]

1. はじめに

「日韓河川及び水資源開発技術協力会議」は、日韓両国の河川及び水資源開発に関する技術上の問題について、研究発表、意見交換を行い、両国の技術協力を推進することを目的に、1977年に日韓科学技術大臣会議の共同声明に基づき設置されたものである。

本年度は第26回に当たり、ソウルにおける本会議及び襄陽南大川の水害復旧現場視察等が行われた。

2. 本会議概要

本会議では、大きく3つの課題が取り上げられ、そのうち、(財)リバーフロント整備センターが関連する課題「河川の管理に関する事項」として、韓国側からは「烏山(オサン)川河川整備事業及び関連研究」、日本側からは「自然再生への取り組み」について発表が行われた。



本会議の様子

韓国においても日本と同様に、1999年に「河川法」が全面改定され、河川整備のような開発事業での事前の環境面の評価が要求されている。

これを踏まえ、烏山川では、都市開発による河川空間の毀損及び水質汚染と、上流貯水池による河川維持流量の断切で招かれた劣悪な河川生態環境を改善することを目的に、多様な自然材料を利用した護岸の造成、生態通路の確保、河道湿地及び中洲、瀬等の造成等、多様な生物生息空間の整備が行われている。あわせてモニタリングを実施することで、水質・流量と工法との関係、生物相と工法の関係等の評価、事業の総合評価、維持管理や持続可能な河川整備工法の対案提示、モニタリングマニュアル作成等、今後の対応や他河川への適応を考慮した検討が行われている。

3. 現地視察

① 水害復旧現場視察(江陵)

韓国も日本と同様、梅雨および台風による水害が多く、更に近年、記録的な集中豪雨が発生している。

2002年、襄陽南大川では、台風“RUSA”により、江陵で875mm/day、東草では137.0mm/hrという記録的な降雨が発生し、甚大な被害を生じている。

この南大川の拡幅工事等を含む河川災害復旧事業及び国道59号線の道路復旧事業を視察した。



蛇籠護岸+覆土で環境、景観に配慮

② 永川(ヨンチョン)ダム視察

永川ダムは、慶尚北道永川市紫陽面聖谷里地先に位置し、浦項製鉄及び鉄鋼関係団地の規模拡大と浦項市の人口増加に対応した浄工水、かんがい用水を供給することを目的とし1980年竣工したロックフィルダムである。

このダムについて、最近の気象異変などを考慮し、水文学的安全性が評価された結果、可能最大洪水量(PMF)が流入時に水文学的安全性が不十分だと評価されたため、現在、治水能力増大事業(余水吐の施行)を通じたダムの安全性の確保が進められている。

ダム堤体前面は、覆土による緑化が図られており、サイト左右岸の生物の連続性が確保されている。



堤体前面の緑化状況

4. おわりに

韓国におけるこのような取り組みは、日本においても参考となる成果であると思われる。今後もこのような技術協力を推進することが両国の技術向上に意義深いものであると感じられた。

最後に、日本側主席代表をつとめられた国土交通省河川局次長 塩島高雄氏をはじめ、団員の皆様、事務局をつとめられた(財)ダム技術センターの方々、さらには韓国側代表団の皆様、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

※) 現 株式会社 建設技術研究所